

山と博物館

第46巻 第8号 2001年8月25日

市立大町山岳博物館



赤沢岳へいたる稜線より立山方面を望む

(山岳博物館創立50周年記念 第51回大町市民登山にて)

市民登山に思う

相澤 文人

何年ぶりであろうか。この夏、久しぶりに針ノ木岳の頂上に立った。今年で五十一回を数えた大町市民登山が、七月二十、二十一日の二日間、爺ヶ岳から針ノ木岳を縦走するコースで行われ、私も立場上、同行する機会を得た。天候にも恵まれ、二十代の若者から七十代までの高齢者まで約三十人の参加者とともに、夏の北アルプスを楽しませてもらった。

この市民登山は昭和二十六年、大町市公民館が町民登山として、スタートをしたと聞く。第一回は地元山へ登ろうと、一泊二日で八月に、鹿島槍ヶ岳を目指して十七人が参加している。以来、今日まで継続する息の長い活動として、すっかり定着している。今年五十周年を迎えた山岳博物館の創立とはほぼ同時期のことである。岳のまち、ならではの行事である。始まったころの引率は、大町山岳会が協力。その後、山岳博物館職員や大町山の会会員、市職員の協力を得て実施され、現在は、再び大町山岳会の会員がリーダーとして引率をしている。主催も、市の公民館から今は体育課に移っている。登ってきた山もさまざまだ。

私が市民登山にかかわり始めたのは昭和四十七年、二十一回目の立山登山から。その後、公民館主事として直接担当するなど十五年間、引率に当たってきた。そして再び十五年ぶりに、かわることになったのである。「毎日仰ぎ見る北アルプスに登ってみたい」「地元山の名前くらいは覚えたい」「今年のコースはまだ行ったことがない」「あの山へもう一度登りたい」「昨年登った仲間とまた登りたい」――参加者の動機はさまざまである。これまで途絶えずに続いてきたことが、肌で実感でき、感慨深くもあった。

大町の市民登山は、地元に住む人たちが一人でも多く、山のすばらしさを体験してもらう機会でもある。いまだそこそこの市町村でも行われるようになったが、これほどの歴史ある市民登山は聞いたことがない。大切にしていかなければならない。

(大町市教育委員会教育次長)

スイスアルプス博物館から寄せられた資料

(前編)

関 悟 志

はじめに

平成十二年二月十六日、大町山岳博物館では、スイス政府観光局(東京都)内に設置されていたスイスアルプス博物館より、同館が所蔵する全資料の寄贈を受けました。寄贈された資料は、スイスアルプス(注1)にちなむ山岳資料八八品目二二七点です。今回、どのような資料が寄贈されたのか、資料寄贈の経過を含めて紹介します。

1. スイスアルプス博物館の設立

スイスアルプス博物館は、平成二年一月十一日に東京都港区赤坂のビル二階にあったスイス政府観光局の隣一室約五三㎡を展示スペースとして誕生した(後にスイス政府観光局の事務所移転にともない東京都虎ノ門へと

移転)。設立の母体となったのは、スイス政府観光局とスイスの大手銀行クレディ・スイスであった。

スイスアルプス博物館はその活動に際し、次のテーマを掲げた。

I. 今世紀、スイスアルプスを舞台に達成された日本人登山家の足跡を長く記録にとどめ、その内容を一般に公開する。

II. スイスアルプスを科学的、人文的な側面から紹介する。

III. 登山鉄道、ハイキング、動植物観察、自然保護などを通してアルプス文化にかかわる多面的な活動の場を形成する。

(「スイスアルプス博物館開館に関する記者発表内容」より)

そもそも関係者が博物館設立という発想を



写真1. 誕生した当初のスイスアルプス博物館
平成2年1月、スイス政府観光局とスイスの大手銀行クレディ・スイスが母体となり、スイスアルプス博物館が誕生した。開館当初は、東京都港区赤坂のビル2階にあったスイス政府観光局の隣1室約53㎡を展示スペースとしていた。



写真2. 「スイスアルプス博物館収蔵資料寄贈記念式典」
平成12年3月、スイス政府観光局日本アジア支局長(当時)アンドレアス・ヴィーランド氏を招いて寄贈記念式典を開催。この席で同氏より腰原愛正大町市長へと寄贈資料が記された目録が手渡され、正式な資料の寄贈にいった。

2. 資料寄贈の経緯

平成十一年十月二十九日、スイスアルプス博物館の設立から資料収集にいたるまで携わってきた同館運営委員(当時)の岡澤祐吉氏が大町市教育委員会を訪れた。このとき岡澤氏から大町市教育委員会へ次のような申し入れがあった。

「昨今の諸事情によって館を閉鎖することとなり、収蔵する山岳資料の全てを一括して受け入れ可能な施設を探している。ついでは大町山岳博物館で受け入れることはできないだろうか。」

その後の検討により、大町山岳博物館での受け入れは可能と判断。先方へその旨を伝え、具体的な資料移管への準備へと移った。

平成十二年二月四日、スイス政府観光局を訪問。そこで資料運搬の日程や方法、寄贈にかかる記念式典について、同局長(当時)鈴木光子氏と打ち合わせを行なった。同月十六日に再びスイス政府観光局へ向うき、資料についての詳細を記録するとともに資料を梱包し、翌十七日に大町へ資料を運搬した。

そして、三月十一日にスイス政府観光局日本アジア支局長(当時)アンドレアス・ヴィーランド氏を招いて、「スイスアルプス博物館収蔵資料寄贈記念式典」を開催した。ここで同氏より腰原愛正大町市長へと寄贈資料が記された目録が手渡され、正式に資料が寄贈された(写真2)。これにより、資料の移管が完了する。

また式典に合わせ、この日より四月九日まで「スイスアルプス博物館から寄せられた資料展」を特別展示室にて開催し、寄贈された主な山岳資料を展示した。その後、数点の資料を常設展へと一時組み込んだが、現在は全

もったのは、昭和六二年(一九八七)スイス政府観光局が開催していた「スイス観光二〇〇年祭」においてであった。この催しを実施するにあたり、日本とスイスのかかわりを歴史的に調査した際、スイスアルプスでの日本人登山家たちの足跡をとらえることができたという。

博物館設立が実行に移されると、観光局や銀行の職員を含めた五名(注2)が設立委員(開館後も運営委員として活動を行なう)として内外の各方面へ働きかけて資料収集などを行った。その結果、スイスアルプスで活動した日本人に関する登山用具などの寄贈・寄託を受ける。一方、スイス本国からはグリンデルワルトのハイマートミュージアム、ツェルマットのアルパインミュージアム、ベルンのスイスアルパインミュージアム、スイス山岳会からの協力を得て、現地の資料を収集するにいった。

こうして、平成二年一月十一日にスイスアルプス博物館はオープンし、以後一〇年にわたり都会のミニ博物館として親しまれることとなる。この間、展示以外にも講演会や映画会を行なったほか、「スイスアルプス博物館友の会」も組織された(写真1)。



写真3. 1921年9月10日、ミッテルレギ後経由でアイガー初登頂後
左よりサムエル・ブラヴァント、横有恒、フリッツ・ストイリ、フリッツ・アマター（グリンデルワルトにて）。グリンデルワルト観光局旧蔵。



写真4. 長谷川恒男がアイガー北壁冬期単独登攀時（1978年）に使用した登山靴

今井（現姓高橋）氏（一九四二）は日本女子医大卒業後（現医学博士）、昭和四二年（一九六七）夏、アイガー北壁に登攀、女性ベアによる世界初登攀を成功させる。昭和四四年（一九六九）夏、アイガー北壁に登攀。頂上へ向かってできるだけ垂直に登る直登ルート「ディレティシマ」（「ジャパンルート」とも呼ばれる）を開拓した（写真5）。昭和四六

b. 長谷川恒男氏の登山靴
昭和五三年（一九七八）、長谷川恒男氏がアイガー北壁冬期単独登攀

c. 今井通子氏の登山用具

昭和四二年（一九六七）、今井通子氏がマッターホルン北壁登攀時に使用した登山靴、ルックザック、ヘッドランプなど。

注3
スイスとイタリアにまたがるマッターホルン（四七七八m）、スイスのアイガー（三九七〇m）、フランスのグランドジョラス（四二〇五m）の三峰の北面にあたる壁のこと。

注2
大森久雄氏（当時実業の日本社出版主幹、日本山岳会会員）
岡澤祐吉氏（著述家、スイス山岳会会員、日本山岳会会員）
土田陽介氏（フリーランス・エディター）
鈴木光孝氏（当時スイス政府観光局長）
青木範子氏（当時クレディ・スイス広報担当）

注1
スイスアルプスは、ベニンアルプス（マッターホルンなど）、オーバールアントアルプス（エンゲフラウメンヒ、アイガーなど）、ベルニナ山群といった山塊からなる。ヨーロッパアルプスでは中部アルプスにあたる。

（大町山岳博物館学芸員）

3. 寄贈資料について
スイスアルプス博物館より寄贈された山岳資料は、おおまかに次のように分類できる。
A. 日本人登山家に関する資料
B. スイス山案内人に関する資料
C. スイス製の登山用具
（このほかにもスイスアルプスの山岳・自然や登山史に関する写真パネル、映像資料、図書資料、岩石資料などあり）
これら資料の中から数点を紹介したい。

横有恒氏が使った門田製アイスピッケル、鉾革登山靴、革チョッキ。これらの資料は社団法人日本山岳会がスイスアルプス博物館へ寄託していた資料で、引き続き当館で寄託資料としてお預かりすることになった。
横氏（一八九四—一九八九）は慶応大学卒業後（在学中に同大学山岳会を設立）、アメリカのコロンビア大学へ留学した（わずか数ヶ月で退学）。その後、イギリスへ渡り、ロンドンでウォルター・ウェストン氏と会う。同氏からスイス行きを勧められた横氏は、グリンデルワルト中心にスイスアルプスの峰々を精力的に登り、地元ガイドたちから登山技術を学んだ。そして、大正九年（一九二〇）九月、アイガーのミッテルレギ後経由で成功する（写真3）。下山後、グリンデルワルトの村人たちの協力と祝福に感謝し、後線に小屋を建てるために一万フランを寄付している（このミッテルレギ小屋は改築にとまじ今年六月に解体され、今後はアイガー山麓で「山岳博物館」として復元されるという）。

時に使用した登山靴。革製の内側には、フェルト生地と毛製のインナーブーツが付いている。靴底はビブラムソールである（写真4）。



写真5. アイガー北壁の直登ルート「ディレティシマ」
1969年7月、加藤滝男、今井通子、天野博文、根岸知、久保進、加藤保男のパーティーがアイガー北壁に登攀。頂上へ向かってできるだけ垂直に登る直登ルート「ディレティシマ」（別称「ジャパンルート」）を開拓した。
ハイマートミュージアム旧蔵。

齋藤 清 ワークショップの試み

峯 村 隆

山岳博物館では創立五十周年の特別企画として、絵画・オブジェ・コラージュなど約八十点を主軸とする『齋藤 清の世界展』を開催中である。

齋藤さんの「人と芸術」については先月の本誌特集号で紹介しているので割愛し、ここでは本展にちなんで試みられた齋藤さんのワークショップについて概略をお知らせし、その意味を考えてみたい。

PART1 河原はアトリエ、美術館

七月二十八日に山岳博物館友の会ことも探検クラブ（丸山優子代表）、丸山卓哉友の会副会長、有川美保子同運営部員、地元で活躍する画家・山下康一さんらの協力を得て、大町温泉郷付近の鹿島川河川敷で行なわれた。参加者は約四十名。

午前は主に共同作業。男と女の二組に分かれ大きな流木のオブジェを作った。洪水でた



PART1 流木のオブジェの作り方を話す齋藤さん

またまここに流れ着いて横たわる木々は、参加者の手の業によって見る見る芸術作品として甦った。

午後は主に個人制作とPART2のための材料拾い。砂の中の水族館、石のサークル、流木の林立（コンポジション）、寄木、石と木の組み合わせ……。作者の制作意図にかかわらず、見る者に様々なイメージをかきたせるユニークな作品が次々と出現した。

PART2

世界にひとつ 作って展示 私の傑作
八月十一日に山岳博物館で行われた。参加者は約五十名。

最初に齋藤展の第三会場（講堂）の窓から眺められる中庭の一部をオブジェ空間にした。東京電力ならびに大興建設のご協力により、トラククレインによる高瀬川不動産の砂と高瀬ダムで引き上げられた巨大な流木の搬入・整地・制作と、短時間のうちに参加者の知恵を結集して作り上げられた。

次に各人がPART1で拾った材料などを台木に立ててオブジェ化したり、着彩して楽しめ、最後に齋藤さんの作品とともに第三会場に併設展示した。題して「河原でひろった物たち展」。作品数は八十点を数えた。

なにげないものの意識化

「こないだ河原で遊んだもんで、歩いててすぐ石ころなんか目に目がいっちゃう。何

かにならんかとかせエー」と、誰かが言った。齋藤さんの狙いのひとつはコレだと思う。

即興的なオブジェ制作は作者に自問自答をせまる。なぜ私はこれを拾ったのか・なぜ作品にしたら面白かったのか・この流木や石ころは、どこからどんな旅をして来たのか……などと。つまり感性の顕在化である。

一面的に答えを押しつけず、素材の生い立ち・生きざまと、そこから導かれる色・形・質感……。それらを混然一体と感じさせる「場」、それが本来の博物館だと齋藤さんは言いたいのか。

「きつかけ」「仕掛け」の魔術

ワークショップの間、齋藤さんはけっして先生として「指導」もしなかったし、齋藤流も押しつかなかった。博物館にとっても初めての試みだっただけに、スタッフも参加者も最初はとまどった。ところがものの五分でこどもたちは要領を察知し、どんどん作品を作っていた。当初「こんな大人気ないものを作って見せたら恥ずかしい」と心のどこかで思っていた大人たちも、知らず知らず独特の空気のおかげで「頭が解け出し、いつしかこども以上に熱中していた。



PART2 野外オブジェを作る



PART2 制作風景

そして「良き集団性」を発揮した「場」でもあった。台の材料として作者の希望どおりにスタッフが木材を切る。すると無用のはずの切りクズや木端が、すぐに次の作品の材料として消えてしまうという、異様なほどの創作的雰囲気漂っていた。

「新しいものが生まれる瞬間」、「創造的で発展的な心のジャンプが連続する瞬間」とは、こんな時なのだと思います。

何も言わず手も出さず、意図を結ぶ。齋藤さんは、まさに魔術師である。

こうしたワークショップの試みは、喜びをもつて参加し、体験し、創造するという、本来の博物館のあるべき方向性をも示唆し、意義深い二日間だった。

（山岳博物館学芸員）

山と博物館第46巻第8号

発行 千代田県立山岳博物館

〒100-8355 東京都千代田区大塚1-5-1

市立大町山岳博物館

TEL 03-6361-1111

FAX 03-6361-1111

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）

郵便振替口座番号 005401713393

郵便振替口座番号 005401713393